==日中国交正常化50周年に思う==

「感情」よりも「実利」を

厳　浩　EPSホールディングスCEO

日中国交正常化50周年を祝い、９月に記念特集号を発行します。それに向け月１回のペースで各界の方々に50周年への思いを執筆して頂きます。５月は、外国人が創業した企業を初めて東京証券取引所の１部に上場し、日本中華總商会の会長を歴任した厳浩氏に寄稿頂きました。

私が初めて「ナマ」の日本人を見たのは、田中首相訪中のときである。白黒のニュースフィルム越しとはいえ、スーツ姿の訪中団に大いに好奇心を掻（か）き立てられたことを、いまでも鮮明に憶えている。なにしろ、田舎の少年にとって日本といえば、それまでは映画や現代革命京劇に登場する旧日本兵ぐらいのものだったのだから、無理もないことだ。

「日本兵」と「田中首相」、「侵略」と「友好」。この相反する両者は私の日本原体験ともいえるものである。だからそれはよいものでもなく、といっていわゆる反日というほどでもない。50年も前、閉鎖的な文化大革命時代を生きていた我われの世代にとって、そもそも外国などは遠すぎる存在だったのである。情報がきわめて限られていただけに、固定観念も少なかったように思う。

交流、飛躍的に拡大

あれから半世紀。客観的にみれば、国交正常化は日中双方ともに大きな恩恵をもたらしたといえよう。統計を出すまでもなく、貿易や人的往来、そして情報の量も、ありとあらゆる面において両国間の交流は飛躍的に拡大してきた。昔を知っている人間からすれば、まさしく隔世の感である。この事実に異論を挟む向きは、少ないはずであろう。

他方、この間における両国の政治や外交関係に目を転じれば、変転が目まぐるしく、それだけに評価も難しいと思わざるを得ない。中国が文革の終息と改革開放政策で経済が急成長したいっぽう、日本は「ジャパンアズナンバーワン」を経てバブルの崩壊を余儀なくされた。そのような背景も作用してのことか、いまや両国の関係もすっかり様変わりしているようにみえる。

人生を左右した日本

いうまでもなく、国交正常化による影響は国家だけに止（とど）まるものではない。とりわけ中国においてはその後の人生までも左右されるほど、多くの市井の人々にも及んだのである。私などは、その典型例ともいえよう。1981年に国費派遣留学生で来日したのだが、気が付けば、この地で人生の大半を過ごしてきている。今やかつての田舎少年も、ひとかどの「日本通」とみられたりするのだが、むろん日本という国は、とうてい「日本兵」と「田中首相」の対比で語れるほど簡単なものではない。中国とは規模こそ違え、日本もまた極めて奥の深い国である。知れば知るほど、そう感じることが多い。思うに、この隣り合う二つの国は長い歴史を通して、ときに相引き寄せられながらも、各々の自尊心がゆえに、ときに相剋も繰り返してきたのではないか。そして、「大和心」が「漢意（からごころ）」との対比で語られるように、その相剋も抑制さえすれば、切磋琢磨（せっさたくま）につながったこともあったのであろう。

それにしても、私のような人間からすれば、両国関係の現状はやはり残念というほかない。在りし日の「友好」ムードを思い起こせば、歴史の皮肉さえ感じざるを得ない。１日も早く改善してほしいと願うばかりだが、いっぽう、いまは「感情」に流されるよりも「実利」に基づく思考こそが求められているとも思うのである。

争点を冷静に議論し、共通点が見出せるのであれば、むろんそれを期待したい。問題はそれが無理な場合である。「感情」を抑制し、「実利」にフォーカスすることで対応できないものだろうか。困難を承知で、私はただそれを願うばかりである。格好は悪くとも、こちらのほうが大人の対応として断然よいように思われる。領土問題ともなれば、厳しい交渉や激しい応酬も当然あろう。ただ、隣国同士であれば、それとて決して稀（まれ）なることではない。徒（いたずら）に感情を煽（あお）るような行為は、問題解決はおろか、かえって将来にも禍根を残すことになりはしないか。

不変の隣国という関係

国際政治に疎い私でも、キッシンジャー氏の「パワーオブバランス」は知っている。確か、田中首相の訪中は、同年に行われたニクソン訪中を後追いするものであった。当時の日本には反対もあったものの、「バスに乗り遅れるな」との声が圧倒的であった。そのことも、日本に来てから古い新聞で読んだ記憶がある。そして何よりも、旧ソ連の脅威が一様に叫ばれていた時代である。50年経った今日、旧ソ連はいまのロシアに衣替えしただけとの見方も多いが、日中両国の関係は米中関係とも相俟（あいま）って、あたかも50年前に逆戻りしたかのように激変している。ただ、国際関係も所詮（しょせん）は「実利」によって規定されるものと割り切れば、そこには永遠の「敵」も「友」もない。変わらないのは隣国という関係であり、そして民衆間の交流のみであろう。なにも三国志の読み過ぎではない。西洋の歴史とて、この種の合従連衡は枚挙に暇がないのである。

私事になるが、学生時代、夏の盛りに奈良を歩き回ったことがある。唐招提寺の近くで素麺（そうめん）を啜（すす）りながら鑑真和上に思いを馳（は）せたのは、いま思い出しても懐かしい。私の郷里である江蘇省張家港市には、その鑑真にまつわる東渡（日本への渡航）成功記念碑が立っている。